第16回

ゲンバの風

日系社会青年ボランティア
Kuroki Go

黒木 豪さん

「野球の『心』を伝えたい」

日系社会青年ボランティアの黒木豪さんは、かつてあの甲子園を沸かせた元高校球児。
「野球を通して学んだことを、ブラジルの野球少年たちに」。
選手たちと真正面から向き合いながら、日々、汗を流している。

黒木さん（後列右端）の粘り強い指導で野球に取り組む姿勢が大きく変わったチームは、全国大会で見事三位に輝いた

教員としての視野を広げたい

青い空に緑の天然芝、舞い上がる白球。そして、土で汚れたユニホームで懸命にボールを追う少年たち。野球を愛するものにとってはこたえられない風景が、そこには広がっている。ここは、ブラジル・サンパウロ市から北西へ約100キロのインダイアツーバ市。日系企業の大きな工場もあり、多くのブラジル日系移民とその子孫が住む。町のグラウンドで練習に励んでいるのは、この町に住む日系少年たちによる野球チームだ。

「次、サード行くぞ！」。守備のノック練習でバットを握るのは、2009年7月から町の野球少年の指導を行っている、日系社会青年ボランティアの黒木豪さん。鋭いゴロの打球が少年のグローブをはじいて転がっていく。苦笑いしてゆっくりボールを拾いに行く選手に、黒木さんが叫んだ。「最後まで手を抜くなーブレーはまだ続いているぞ！」

小学生時代に野球を始めた黒木さん。夢は、「甲子園出場」と「プロ野球選手になること」。まさに「野球少年」だった。めきめきと実力をつけ、野球の名門、横浜高校に進学。厳しい練習の末、高校2年のときには選抜高等学校野球大会に出場する。そして、夢だった阪神甲子園球場のグラウンドで、4番打者としてチームをけん引し、見事、全国準優勝へと導いた。その後、大学でも野球部で活躍した黒木さん。惜しくもプロ入りの夢はかなわなかったが、その青春は常に野球とともにあった。

大学卒業後は、公立中学校の保健体育講師として勤務。だが、多感な生徒たちと日々接する中で、野球中心の生活を送ってきた自分の「視野の狭さ」を痛感する。「生徒の気持ちに共感し、いろいろな視点からアドバイスを送ることのできる、広い視野を持った教員になりたい」。そんな思いを胸に、黒木さんはいったん仕事を辞め、日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ渡った。

「高校時代、素晴らしいチームメイトに出会えたことに感謝している」という黒木さん。ブラジルの教え子たちにも、野球を通じてかけがえのない仲間を作ってほしいと願う

かけがえのない経験 そして仲間たち

初めは、日本とはあまりに異なる野球への取り組み方にとまどうばかりだった。驚いたのは、遅刻の多さ。練習初日、選手が何時間待っても現れなかったときには、怒りを通り越し、あきれてただ笑うばかりでした」。また、ごみをグラウンドに捨てる、用具を乱暴に扱う、あいさつや返事ができない、ミスをした仲間を露骨に批判するなど、野球をする以前の問題が山積みだった。「技術さえあれば、試合に勝てさえすれば良いという空気があり、それ以外の大切なことがおろそかにされていた」と振り返る。

黒木さんの活動は、まずはこうした一人一人の「心」を鍛え直すことから始まった。だが、ブラジルで大らかに育った日系少年たちの考え方や価値観を変えるのは容易ではない。「なぜあいさつや礼が必要なのか」、「なぜ用具を大切にしなければならないのか」。その本当の意味がなかなか理解されず、「これも文化の違いなのか」とあきらめかけたこともあった。それでも、野球で培った粘り強さ、自ら率先して手本を見せる行動力によって、少しずつ、選手たち、そしてほかの指導者や保護者などの理解を得られるように。今では、「野球に対する姿勢、態度が明らかに変わってきた」と感じている。

技術面でも、当初は野球の基本動作もままならなかった彼らが、黒木さんの基礎を重視した練習でどんどん実力を伸ばしていった。「練習は決してうそをつかない」との黒木さんの言葉に後押しされ、かつてない猛練習にも選手は食らいついてきた。そして、09年11月に行われた全国野球選手権大会。以前は予選で敗退していたチームが見事三位に輝く。

「コーチ、ありがとう！」

試合後、走って礼を言いに駆け寄ってきた選手の姿に、「それまでの苦労が吹き飛ぶほど、幸せだった」。気が付けば、思わず号泣していた。

そんな黒木さんの生き方、野球への姿勢の原点となっているのが、厳しい練習と寮生活を通して、人間形成の上でも多くを学んだ高校球児時代の経験だ。恩師であり、高校野球の名将として知られる横浜高校野球部監督・渡辺元智さんも、「人間到(いた)る処青山あり」の精神で多くを学ぶとともに、野球で培った忍耐力や物事に対する感謝の心を広く伝えていってほしい」と、地球の裏側で日々奮闘する愛弟子にエールを送る。

「高校時代、つらい練習でふと自分に負けそうになったとき、いつも苦楽をともにした仲間たちが支えてくれました。夢や目標を持ち、努力することで、一生感謝できるかけがえのない仲間と巡り合える。そんな「心」の通ったチームをここでも作りたい」。黒木さんの横で張り切る少年たちの歓声が、真っ青な大空に吸い込まれていった。

(右)選手に打撃のアドバイス
(左)高校球児時代の黒木さん。元チームメイトの中には、現在プロ野球で活躍している選手も
(下)グラウンド整備に励む少年たち。こうした施設や用具への感謝の心が、良いプレーを生む

くろき・ごう
1985年宮崎県出身。私立横浜高等学校硬式野球部の主力として活躍。日本体育大学体育学部卒業後、公立中学校の保健体育講師に。2009年7月より、日系社会青年ボランティア・野球隊員としてブラジルへ。

※「人間はその気になればどこまでも骨をうずめることができる。大きな志を持って、世界に出よう」という意味の漢詩。

サッカースクールの生徒とロシナンテスのメンバー（左端が海原さん、右端が川原さん）。ナショナルチームも利用するこの施設で少年少女約70人が練習を行っている ©内藤順司

One for all, All for one

「非力な僕らはやせ馬のロシナンテ」。
だが、彼ら自身がそう考えるよりもずっと、その活動はスーダンの人々の心強い支えになっている。
かつてラガーマンで“花園”を目指していた川原尚行さんの志は、
今、高校時代のチームメイトの思いとともに、がっちり“スクラム”が組まれている。

忘れられない最後の試合

NPO法人ロシナンテスの誕生は、飲み会でのこんな会話がきっかけだった。

「外務省を辞めて、スーダンで医療活動をしようと思ってるんだ」

「それなら先輩、何かお手伝いさせてください」

5年前、外務省の医務官だった川原尚行さんの一言に、高校時代の2年後輩の海原久郎さんは二つ返事でこう答えた。普通なら、考え直すことを諭したくなるような決断。しかし、海原さんの目は真剣だった。

その訳は、川原さん高校3年。大阪府の“花園”で開かれる全国高校ラグビー大会の出場をかけた最後の県大会でのこと。花園行きはほぼ確実視されるほど、仕上がり十分だったチームにアクシデントが起こった。攻撃（フォワード）と守備（バックス）をつなぐ要のスクラムハーフの選手が出場できなくなったのだ。そこで急きょ抜擢されたのが海原さんだった。「人部して半年、プレーヤーとしての熟練度は低く、試合で体の大きな選手につぶされ脳振とうを起こしてしまいました」。

とはいえ、スクラムハーフは専門的なポジション。ほかにこなせる選手はいなかった。「お前しかいない！」。川原さんのその言葉に奮い立たされるように立ち上がった海原さん。しかし、全身全霊で戦うもチームは敗れ、川原さんら3年生は引退した。

「勝てるはずの相手に負けたんです。自分が何の貢献もできなかったことが悔しくて、その思いがずっと心の傷として残っていました」

それから20年余り。久々に集まった席で川原さんの決意を聞いた海原さんの脳裏によみがえってきたのは、高校時代のあの思い出。「今なら役に立てる“ポジション”があるんじゃないか。そう思って、川原さんのサポートを申し出た海原さん。部員だったほかのメンバーも加え、今度は“ロシナンテス”として共に新たな闘いに挑むこととなったのだ。

（右）文化的背景から女子教育が軽視されがちなスーダン。ロシナンテスでは まず学校建設から取り掛かった（左）宗教上、肌を露出できず自由にスポーツを楽しめない女の子に対してもサッカーを指導。今では大会にも出場できるほどレベルが向上した ©内藤順司

スーダンで見つけた真実

ロシナンテスの活動の中心は、無医村だったシェリフ・ハサバッラ村に立ち上げた診療所で、地元の人々の病気やけがを看ること。医師である川原さんが、スーダン人の医療従事者に技術指導をしながら運営に当たる。また、軽視されがちな女子の教育事業や母子保健活動も行っている。4月からはJICAの草の根技術協力事業と連携して、妊婦検診や乳児検診の普及、女性の健康教育にも力を入れていく予定だ。

こうした活動の中で、ロシナンテスが大切にしているのがスポーツ事業。ダルフールという不安定な地域を抱えるスーダンだからこそ、ロシナンテスの面々はこの活動の意義を感じている。「被害に苦しんでいる人々を直接助ける方法も一つですが、子どもたちに夢を与えることも必要です」（川原さん）。

どんな協力方法が有効だろうか。多くの話し合いの末、スーダンサッカー協会主催の少年サッカースクールを立ち上げることになった。サッカーはスーダン一人気のスポーツだ。また、地方の学校への巡回指導も行う。スポーツ振興を図ることで地方と都市部の格差を縮めるとともに、青少年の健全な育成に貢献できる。

「あるときダルフールについて聞くと、スーダン政府、国連、欧米…と、みんな言っていることが違い、何が真実か分からなくなりました。でもその中で、一つだけ確かなことがあったんです。それは、子どもたちが全員夢中でサッカーをやっていたことでした」と川原さん。

彼らの心を支えるサッカー。これなら夢を与えられる！

「ラグビーに、『One for all, All for one』という言葉がありますが、スーダンの子どもたちにはまず、自分がチームにどんな貢献ができるか見つけてほしい。そして、苦しいときはみんなでフォローしようという気持ちを持ってもらえたら。さらにその先に、国のため、アフリカのため、世界のためという心が生まれてくれればよりうれしいです」（海原さん）

試合以外では厳味もないノーサイドの精神。体当たりの激しいプレーの中で反則せず正々堂々と戦うフェアプレーの精神。ロシナンテスのメンバーに刻み込まれたこのラグビー精神は、対立構造の続くスーダン社会で多くの意味を持つ。決して非力ではない川原さんの行動力にプラスされた海原さんら“PLAYERS”の熱き思い。それが重なり合う様子は、まさしくがっちりと組まれた“スクラム”のように思えた。

福岡県立小倉高校時代、苦楽を共にした川原さん（最前列右から2人目）と海原さん（最前列左端）。ロシナンテスの活動は、ラグビー部員、OB会、教職員など母校の関係者にも支えられている

巡回診療から始まった医療活動。診療所を拠点とする現在は、村人に限らず、周辺地域の人々にも開かれた場所となっている。村唯一の診療所。人々の川原さんへの信頼は厚い ©内藤順司

サッカーはスーダンで最も人気のあるスポーツ。給争が続くダルフールでも村のあちこちでボールを追いかける子どもを見かける ©竹林尚哉